

〈史料紹介〉

日本における鄭成功像の形成

——明治期の新聞記事を中心に——

新 納 遼 子

1 はじめに

17世紀中葉に近い明末清初の時期に東アジア世界で名を馳せた人物として鄭成功が知られる。中国人鄭芝龍を父に、平戸の田川氏を母にもつ彼は、幼少期に母田川氏に長崎で育てられたのち、中国に渡ることになる。成功自身が成長期を迎えた当時の中国はまさに明朝から清朝への交替期であり、その時代の中で鄭成功は、清へ降伏した父と袂を分かち生涯明朝に仕えた人物であることは周知のことである⁽¹⁾。

台湾はもちろん、日本、中国でも人気のある武将のひとりであり、彼のその人気ぶりは「開台聖王」として神格化され祀られているほどである⁽²⁾。鄭成功について、復台運動は中華民族にとって重要で、政治・法を厳しく敷き、施政を正しくすることに努め、教育にも力を入れ、さらに反清朝運動を続け、明朝の実質的な存続期間が延長され、後世に残した有用な基盤が現代へも影響を与え、現代の台湾社会に繋がると評される⁽³⁾。

この鄭成功について日本で知られるのは、江戸時代中期以降でとくに近松門左衛門の浄瑠璃『国姓爺合戦』の初演（正徳5、1715年）以降のことである⁽⁴⁾。日本でも比較的親しみをもって知られるが、それでは具体的にどのように見られていたのか明治期の新聞に掲載された記事を中心に述べてみたい。

2 鄭成功とその時代

1) 鄭成功研究の回顧

鄭成功について清末の黄遵憲が『日本國志』巻六、鄰交志上三、華夏⁽⁵⁾で取り上げ、父の鄭芝龍が唐王の命により日本に援兵を乞うたいわゆる「日本乞師」⁽⁶⁾について触れている。この日本乞師は成功しなかった。しかしそれは表面上でのことで、実際には武器や援軍を惜しまなかったという。また、鄭軍の内には鎧を身に着けた日本の武士のような格好で戦に臨む部隊があり、それは鉄人部隊と呼ばれ、逞しく強壮な者が集っていたなど⁽⁷⁾、日本の鄭成功研究には石原道博氏による『鄭成功』⁽⁸⁾、『国姓爺』⁽⁹⁾等が知られる。

一方中国では1982年に鄭成功逝去320周年を受け、鄭成功研究學術討論会が中国の厦門で開催された。その成果として『鄭成功研究論文選』（1982年）⁽¹⁰⁾、『鄭成功研究論文選續集』（1984年）⁽¹¹⁾などがある。鄭成功の海外貿易について李瑞良氏の「鄭成功和海外貿易」⁽¹²⁾は、鄭成功の

海外貿易による経済活動の実態を、陳孔立氏の「鄭成功収復台湾戦争的分析」⁽¹³⁾は、鄭成功とオランダとの戦闘について分析した。さらに傅衣凌氏の「関于鄭成功的評価」⁽¹⁴⁾は「歴史上偉大的民族英雄」⁽¹⁵⁾として高く評価し、陳国強氏の「民族英雄鄭成功収復台湾の偉大貢献」⁽¹⁶⁾は、中国史の偉人として評価するなど、鄭成功に関する高い評価は枚挙に暇が無い。

2) 鄭成功とその時代

この鄭成功像に関しこれまで多くの専門家が述べてきたが、これまで看過されてきた史料の一つに鄭成功の時代に比較的近い乾隆四十年（1775）『潮州府志』⁽¹⁷⁾卷三十八、征撫に鄭成功の伝記が見られる。そこで本稿ではこの史料を参考に鄭成功とその時代を簡単に述べたい。

乾隆『潮州府志』に、「鄭成功南安人、父芝龍、娶倭婦生、初名森、見故明唐王朱聿璘、王奇之、賜國姓、易名成功」⁽¹⁸⁾と述べられ、鄭成功は南安の人で、父親は鄭芝龍といい、日本人の母親から生まれ、諱を森と言った。明のかつての唐王朱聿璘から気に入られ、国姓を賜り、成功と名乗ることになる。順治三年（1646）三月、唐王は福州で即位し、成功は忠孝伯として封ぜられるが、福州が清に降り、芝龍は清に降伏するも成功はそれに従わず、清軍は芝龍を連れて北に去った。成功は遂に陳輝張と二艦で海に乗り出し、順治四年（1647）に、数千人の南湾の兵を収めた。かつての永明王・朱由榔は、広東省の肇慶において永曆帝として即位し、成功は南湾の厦門、梧州両島を占拠した。順治六年（1649）七月、永明王は成功を廣平公に封じ、順治七年（1650）に成功は潮州に入り、沿海を採り各県の貯蔵物を徴収し船に積載して輸送した。順治八年（1651）、清軍は南湾にて敗れ、清軍提督・楊名時は十二月漳浦県にて官兵を退去させた。順治十年（1653）、清軍の金固山が海澄県を攻めたのに対し、成功は県城に立てこもり抗戦している。順治十一年（1654）に清軍は成功に帰順を呼びかけるが、従わなかった。順治十五年（1658）、永明王は成功を延平郡王に封じた。ついで成功は南京を攻めるが大敗を喫した。しかし、順治十七年（1660）三月、沿海諸県を襲撃掠奪し、十一月に台湾に拠点を築いた。康熙元年（1662）五月、鄭成功は死去し、彼の子の鄭經があとを嗣ぎ、沿海での剽掠を行った。康熙二年（1663）に永明王が亡くなったが、その後も鄭經政権では永曆の年号を用いた。康熙十九年（1680）、鄭經は大陸の回復に挑んだ。康熙二十年（1681）正月、經が没した後、子の克塽が継ぐが破れ、克塽はついに清に降った。これが鄭成功から經を経て克塽までのおよそ三代 38 年に及ぶ台湾政権の時期である⁽¹⁹⁾。

この乾隆『潮州府志』に見られる記述のほとんどに、清に抵抗する抗清活動が述べられている。このように鄭成功および鄭氏政権が、抗清のための軍事資金の財源としたのは、海外貿易であり、当時の清朝側の記録「五大商會定老等私通鄭成功殘揭帖」⁽²⁰⁾などからも成功の経済事情の一端が知られる。このような抗清活動も空しく、鄭成功は 1662 年 5 月 8 日、台湾で急死した⁽²¹⁾。その半生をかけての抗清復明が叶うことはなかったのであった。

鄭成功は、その生涯を最後まで明の忠臣であることを貫いた。しかし、その思いは報われることなく彼の孫の代には台湾も清朝の支配に入り、明が再び興えることはなくなった。ところが江戸時代の浄瑠璃作者、近松門左衛門が鄭成功を題材にした作品『国性爺合戦』には、彼は悲願の復

明を達成している。このことから推測できるのは、鄭成功の生涯は、“二君に見えず”といった武士道精神を好む日本人にとって心動かされるものだったのではないかということである。

そこで日本人の鄭成功像に関して次に述べたい。

3 日本における鄭成功像の形成

中国や台湾の鄭成功についての研究は、彼が幼少まで過ごした日本での生活についてはほとんど触れられていない。近松門左衛門が『国性爺合戦』の題材として取り上げた点からも推測できるように鄭成功は日本においても、忠義を持った「清廉潔白」な武将として描かれている。しかし、中国本土における鄭成功研究では、生い立ちから少なからず日本的な性質を持っていると推測される鄭成功の側面についての関心はほとんど看過されている。

そこで鄭成功が日本でどのような人物像として見られたかを主に明治時代の世相を通して述べてみたい。

なぜ明治時代の日本に定めたかという点、その当時の日本の世相と、鄭成功の持つ性格が関係する。明治期の日本では、「鎖国」を経て開国した後の初めての対外戦争である日清戦争が起こった。明治27（1894）年、日本軍と清軍は朝鮮半島で勃発した甲午農民戦争を鎮めるために互いに出兵した。戦争は鎮静化したが、出兵した二国の軍隊がその後も朝鮮半島に駐留し、朝鮮国の国土を巡る二国間の日清戦争へと発展した。この戦争は翌年の1895年に終結し、勝利した日本は、清との間に下関条約を締結し、その条項の一つが台湾の割譲である。このことから台湾の開祖で日本にも縁を持つ人物として、鄭成功の人物像は日本で注目されたのではないかと考えられる。

当時の日本が鄭成功に関心を向けた理由は次のように考えることができるであろう。

第一は、日清戦争後に台湾の領有権が日本に渡り、日本人の関心が台湾へ向けられ、“日本人の血が流れる”鄭成功にも強い関心が寄せられるようになったこと。

第二は、明朝に仕え続けた鄭成功の姿勢と武士道精神とである。

日清戦争以降に日本の領土となった台湾にとって、その基盤を築いた開祖とされる人物鄭成功が、日本と深い関係にあることを知った日本人の意識の中で鄭成功像がどのように形成されたか明らかにしたい。

それでは、明治期の日本で鄭成功に対するイメージがどのようにであったかを明らかにする方法として、明治時代の新聞記事の鄭成功像を検討する。新聞に見られる鄭成功に関する記事の一覧を表1に掲げた。

表1 明治時代における鄭成功関係記事一覧

タイトル	掲載紙名	号数	年月日	頁
旧跡探索が趣味の横浜在住英商社員が九州平戸で、鄭成功の墓碑を発見	讀賣新聞	2788	1884年5月8日	2
獨參湯の効能	讀賣新聞	3667	1887年4月5日	2

清国公使李経方に密通した鄭某なる人物の前歴と人物像	讀賣新聞	4935	1891 年 3 月 11 日	2
悖行事件の顛末	東京朝日新聞	1907	1891 年 4 月 10 日	1
〔渉史余祿〕 鄭成功の弟・田川七左衛門の願書	讀賣新聞	5819	1893 年 10 月 2 日	1
〔渉史余祿〕 鄭成功の弟・田川七左衛門の願書	讀賣新聞	5833	1893 年 10 月 16 日	1
国姓爺討清記	東京朝日新聞	2974	1894 年 10 月 25 日	5
明の遺民劉姓の事	東京朝日新聞	3014	1894 年 12 月 13 日	2
史談会の講演 丸山正彦の演題「平戸における鄭成功」	讀賣新聞	6515	1895 年 9 月 16 日	3
史談会の講演 丸山正彦の演題「平戸における鄭成功」	讀賣新聞	6516	1895 年 9 月 17 日	3
史談会の講演 丸山正彦の演題「平戸における鄭成功」	讀賣新聞	6517	1895 年 9 月 18 日	3
〔広告〕 丸山正彦著「台湾開創鄭成功」／小林新兵衛	讀賣新聞	6569	1895 年 11 月 12 日	6
台湾通信 黒崎美智雄 台湾樟腦の調査 樟腦製造の沿革	東京朝日新聞	3332	1896 年 1 月 3 日	9
社説 台湾行の吏員を餞す	東京朝日新聞	3434	1896 年 5 月 7 日	2
台南の鄭成功廟を開台神社と改称へ	讀賣新聞	6904	1896 年 10 月 12 日	6
台湾近事 新総督の励精 総督の訓示 在台北	東京朝日新聞	3620	1896 年 12 月 15 日	2
台湾島巡視 (22) 黒崎美智雄	東京朝日新聞	3821	1897 年 5 月 2 日	6
台湾島巡視 (26) 台南の農業 黒崎美智雄	東京朝日新聞	3854	1897 年 5 月 15 日	6
中国明末の忠臣・鄭成功九世の孫が神奈川県庁訪問 本邦各地を漫遊中	讀賣新聞	7254	1897 年 9 月 28 日	4
延平王九世の孫	東京朝日新聞	4044	1897 年 9 月 28 日	2
台湾の真相 (第 30) 交通機関と農工商業 (続) 特派 小川定明 樟腦 砂糖 食塩 鉱物	東京朝日新聞	4117	1897 年 12 月 13 日	6
台湾施政方針に関する意見書	東京朝日新聞	4532	1899 年 2 月 15 日	7
鄭成功を祀る台南・開山神社の例祭風景／台湾	讀賣新聞	8138	1900 年 3 月 2 日	3
長日消閑 稀有の珍書 子供の出世	東京朝日新聞	6057	1903 年 6 月 2 日	3
〔広告〕 書籍 宮崎来城著「鄭成功」、池田錦水著「恋の婦人氣質」・大学館	讀賣新聞	9462	1903 年 10 月 17 日	6
新刊各種	東京朝日新聞	6204	1903 年 10 月 29 日	7
〔今古人物競〕=77 メンチェル・ジンチス×鄭成功／覆面論士 (連載)	讀賣新聞	9742	1904 年 7 月 24 日	1
清国叛乱観 (上) 根津一氏談	東京朝日新聞	9049	1911 年 10 月 15 日	4
福建視察 (5)	東京朝日新聞	9373	1912 年 9 月 3 日	4
台湾記 (5) 台南の旧都 (下)	東京朝日新聞	10710	1916 年 5 月 2 日	3

※注：表中にある太字部分は本論中に引用している記事である。

以上のように、明治及び一部に大正時代を含む新聞に掲載された鄭成功に関連する記事は 30 件が知られる。これらの記事から日本人から見た鄭成功像について彷彿させる部分を取り上げ分析してみたい。

記事の内容は大きく言って、鄭成功に関する各出版物・作品、台湾の産業発展、鄭成功への歴史的認識に関するものに大別できる。そこで順次これらについて見てみたい。

I. 鄭成功と各出版物・作品に関する記事

『讀賣新聞』朝刊 1887 年 4 月 5 日付「獨參湯の効能」には、次のようにある。

猿若町の市村座ハ近頃流行の不景氣病に幾分か感染せしと見え大入大繁昌と云ふ程の當り狂言の少さを座主ハ頭痛に病みしものと見え今度ハ芝居道の獨參湯と唱ふる「仮名手本忠臣蔵」の押通しに「國姓爺」と一幕挟みて興行と始めきるに獨參湯の効空（き、めむかし）からぞ其効能著明にして一昨日（日曜日）の如きハ土間ハ勿論東西並に向棧敷とも見物人充滿して（以下省略）

これは、歌舞伎劇場の中でも江戸三座に数えられる市村座が、客の入りが悪いことの解決策として、それまで上演していた『星月夜見聞實記』、『桃山譚』（どちらも作者は河竹黙阿弥）に替わって⁽²²⁾、「客入りによく効く」ことから獨參湯として例えられる定番の狂言『仮名手本忠臣蔵』に加えて『国姓爺合戦』を採用したところ、劇場が大盛況を収めたといった内容の記事である。この二作の共通点として挙げられるのは、仕えた主に対して「義」を貫き通したという内容の作品であるという点である。

この記事と上の二つの作品から推測するに、当時の日本人は上の者に対する忠誠心や義を通すことの道徳性を重視することに美德を感じていたことが伺える。

客足を集める起爆剤、すなわち獨參湯の代名詞として扱われることの多い『仮名手本忠臣蔵』と並べられていることから、『国姓爺合戦』もこの当時かなりの人気を博していたことがわかる。

東京『朝日新聞』1894 年 10 月 25 日付「国姓爺討清記」に次のようにある。

父は唐土、母は日本といふ有名な鄭成功が、臺灣の一孤島に拠りて明朝の正朔を奉じ、愛親覺羅氏に抗せし始末を正史に拠り平易に書く和げたるもの今や正々堂々の王師進んで頑冥の清国を討する。固より鄭の覺羅氏に抗すると同時に談にあらざれども、亦是時に取ての好著述、然も其著者の依田學海翁、讀め、讀め諸君、此國姓爺の討清記を（神田區表神保町六合館發行）。

この記事は、依田學海による著作『国姓爺討清記』⁽²³⁾の宣伝に関するものである。その表紙は、右側に書名の『国姓爺討清記』とあり、左上にはおそらく台南の紅毛城の絵が見え、中央から下には中国船を描いている（右図参照）。

そして依田學海は同書の冒頭には、

讀め、讀め、諸君、世にも名高き討清記を。

ともあるように、鄭成功が満洲族の清と闘った記録をもとにまとめた書である。



日本人である依田學海によって書かれた『国姓爺討清記』の紹介文にも「父は唐土、母は日本といふ有名な鄭成功」という記述があり、鄭成功の出自に関する情報が添えられている。これは1894年に刊行されたものであり、時期はまさに日清戦争時期に符合することから、清国に対抗する明末の鄭成功と清国に対抗する明治期の日本国という構図を重ね合わせているようにも見える。

『讀賣新聞』朝刊、1895年9月16日、9月17日、9月18日付「史談会の講演 丸山正彦の演題『平戸における鄭成功』」には、次のようにある。

成功の生まんとするや金鯢の壁俄におどろどろとして中空に鳴り渡り香気また空中に薫ぞ妻は即ち恍惚として海中に飛び込みりとあり思うに支那人は成功を以て神とまで崇めしかるべしかと。是より丸山氏は子龍の明に渡しし事、成功を招きし事、妻田川氏の何故子龍と共に行かざりし事、成功の母とわかるるや年わずかに七歳、夜な夜な東方と望んでその幸福を祈りて一日一夜も忽諸せざりし事、正保年間子龍及び成功より其妻其母なる田川氏と招きし事、子龍が清に下りし事、成功の死を以て之を諫めし事、妻田川氏の千秋城に自ら剣を抜きて割腹せし事等詳細細密に縷述し来たりて更に台湾における鄭成功として論じている彼は純粹の支那人とは如何に異なりしか（略）

慈母と共に死なんとまで歎きしが如き忠臣としては泣いて父子龍の清に下ると極諫して已ざりしが如き忠孝孰れかかくる所あらん。而して其回復の功ならず中道にして沮喪なるや退いて父と共に清に下りて孝道と全うとせんか明朝の忠臣たる能はぞ進んで孤忠の臣たらんか不孝の子たると免れを即ち断乎決する所あり。

1895年9月14日に一ツ橋大学で行われた史談会で発表された、丸山正彦氏による講演「平戸に於ける鄭成功」についてまとめられた記事であり、これは1895年9月16日、9月17日、9月18日の三日間に渡って『讀賣新聞』朝刊に載せられた。

17日には鄭成功とその母田川氏について多く触れられており、またこの日の内容により丸山氏は鄭成功に関し、父である芝龍が清朝に下ることを嘆き責めたうえで自らは明朝の忠臣でありつづけたことについて触れており、丸山氏はこういった鄭成功の性質を、他の中国の武将とは異なった考え方を持っていたのであると述べている。

自ら法を設けて民心を安んぞ其政治に法律に理財に明敏快利の才と揮ひじハ以て知るべし斯の如き人の下に属せし台湾全土其驚悍強勇にして尋常一般の支那人民と其類を異にし容易に征服し易からざる蓋し台湾土民ハ此の鄭成功によりて日本的気性の深く其腦裡に印象せるならんかと。（中略）

鄭成功の事に関し帝國雇教師リース氏は嘗て人に語りていふ、鄭成功が日本人の腹に宿りしとの事、即ち子龍が田川氏を娶て孕せしとの一説ハ虚傳なるが如し。之を其當時我國平戸港在留外人の手に成る諸書に参考するも鄭成功の事実ハありと雖も其母ハ日本人なりしとの証拠ハ見止むる能はず。

18日の記事は鄭成功が台湾に渡った後のことについて触れ、台湾の政治や法律の整備に腕を振るう鄭成功を明敏であり、またその勇敢で猛々しい性質とは一般の中国の人々とは類を異に

し、その姿は台湾本土の人々にとって日本的気性を印象させたと言われ、丸山氏は評している。

この点から見るに、鄭成功には、何らかの形で中国本土に住む人々とは異なった点があったことが伺える。その性質を鄭成功が身につけた契機は、幼少期に母とともに過ごした日本で、まさに日本における武士道精神である「二君に見えず」という彼の忠誠心の発端となったのではないかと考えられる。

しかしその一方で、同記事に寄せられた当時帝國大学（現在の東京大学）の史学科で教鞭をとったルートヴィヒ・リース氏⁽²⁴⁾はこの鄭成功の出自に関して異論を唱えており、平戸に滞在した記録は当時の在留外人の手記にもあるものの、彼の母が日本人であったという証拠は見当たらないとしている。

以上の5件は、歴史上の人物としての鄭成功から派生した作品や、彼に関する学術講演の内容である。

『讀賣新聞』朝刊、1887年4月5日付「獨參湯の効能」の記事は、歌舞伎の演目『国姓爺合戦』について書かれたもので、時期から推測するに、鄭成功は日本人にとって「日本の武士道に通じる厚い忠誠心を持った歴史上の人物」と、好意的に映っていたであろう。依田學海による『国姓爺討清記』は、鄭成功と反清復明を題材にした小説である。上述のようにこの本は1894年に刊行され、その時期に起こった日清戦争になぞらえた作品と言える。このような時代背景により鄭成功は、日中混血の英雄という姿にとどまらず、日清戦争におけるプロパガンダ的手法を先導するための良い手本となったのではないだろうか。

1895年9月16日、9月17日、9月18日の『讀賣新聞』朝刊に3日間にわたり掲載された丸山正彦氏による講演「平戸に於ける鄭成功」記事は、丸山氏の講演の要点を要約し、そこに記者自身の考えやルートヴィヒ・リース氏による反論的な意見を加えた学術記事である。これは明治時代に発表された日本人による鄭成功研究の一成果であり、参考として加えた。

II. 鄭成功と台湾の産業発展に関する記事

東京『朝日新聞』1896年1月3日付の「台湾通信 黒崎美智雄 台湾樟腦の調査 樟腦製造の沿革」に次のようにある。

樟腦ハ臺灣島に於ける生産物中の重なる者にして世界の市場に好評を博せることハ、已に世人の熟知ある所あり。而して其製出八年を追ふて益々盛大に趣き光緒二十年（明治廿七年）の輸出高ハ實に三百九十万四千七百十二担の多に及べり。今本島に於ける樟腦製造の起原を繹ぬるに未だ其詳なるを知る能はずと雖、土人の言に依れば康熙年間鄭成功の臺灣に據りし時其製造法を日本より傳たるを以て始とも後同治年間に至り宮保（太子大少保を云）沈某嶺某前後來島せし頃より稍盛運に向へり、然れども其製造人ハ生蕃人の殺害を恐れ深く山地に入るを得ざりし。

台湾で生産されていた樟腦に関わる記事からの抜粋である。樟腦は、セルロイドが発明された1890年からその主原料として使用されている。しかしそれより以前、樟腦は中国医学においては風湿症（リウマチ）、皮膚の炎症、胃腸疾患の治療に使われ、西洋医学においては、強心剤と

してや、皮膚病治療、神経衰弱症の効能薬とされていた。また、人間の治療薬以外の用途としては、防虫剤や発火のための材料、香水、穏定（安定した）油漆、インド仏教の儀式を行う際のお香として用いられていた⁽²⁵⁾とある。

樟脳を主原料とするセルロイドは、第二次世界大戦以前のアメリカ、ロシア、日本などの国内工業生産の中でも重要な地位を占め、櫛やボタン、フィルム、玩具などが製造された。そして台湾は、日清条約により日本に占拠されて以降、日本が樟脳の生産工場を多く設けてその生産に努め、樟脳の出産大国となったという⁽²⁶⁾。その樟脳の起原を語っているのが上記の記事であり、台湾での樟脳の製造方法が伝播したのは鄭成功の治世だったという。

東京『朝日新聞』1897年12月13日付「台湾の真相（第30）交通機関と農工商業（続）特派 小川定明 樟脳 砂糖 食塩 鉍物」には、次のようにある。

砂糖 北部の茶、中部の樟脳と共に三大産物の一にして是亦鄭成功の時幕僚劉國軒と云ふ人、土民に糖業を教へたるに始まり、康熙年間支那より練熟なる職工の渡來するありて製法大に改良し、其後今を距る凡四十年即ち咸豐年代に海外輸出の路開け大に利益を増進し遂に今日の發達を見るに至りしとなり。

（省略）将来負夫（か）の三大産物たる茶、砂糖、樟脳を始め大に一般の殖産興業を奨勵し、倍々内地人の移住を促して、智識を全島に普及し大に國力の發達を圖らんとせば。

台湾で製造されていた砂糖に関わる記事からの抜粋である。林滿紅氏の『茶・糖・樟脳業與臺灣之社會經濟邊遷（1860～1895）』によれば、鄭氏政権の時代から、台湾が日本の領有地となった時代まで栽培されていた甘蔗は日照りに強く、虫害や病にも強く、また糖のよく取れるもので、新種の導入は一切されなかったという⁽²⁷⁾。おそらく、この種の甘蔗は台湾の地に適合し、新種の導入をする必要がなかったためであろう。

この記事によると、台湾における砂糖・茶・樟脳は、鄭成功の治世下に彼の幕僚である劉國軒が元々台湾に住んでいた人々に伝えたと言われている⁽²⁸⁾。そして始まった製糖は製造方法を改良されながら、この当時から遡ること40年、咸豐帝（位：1850-1861年）の治世の時代に海外輸出をはじめ、今日まで發達してきたという。

以上の2件は、日本の統治下における台湾の産業について記された記事である。

鄭成功が台湾政権を打ち立てて以降に、台湾の産業の發展は著しいものとなったことが推測される。また、東京『朝日新聞』1897年12月13日付「台湾の真相（第30）交通機関と農工商業（続）特派 小川定明 樟脳 砂糖 食塩 鉍物」の記事や林滿紅氏の研究にもあるように、日本統治下の台湾には三大産物として砂糖・茶・樟脳があり、そのうちの二つが鄭成功の時代から始まったと言われている。

特に樟脳については、明治7（1874）年に創業された所謂総合商社「鈴木商店」が樟脳から採れる樟脳油に着目し、神戸旭通に「直営樟脳製造所（再製樟脳製造）」を設立し、樟脳の輸出を手掛けるなど、日本の産業にもその恩恵に預かった⁽²⁹⁾。鄭成功の時代から伝えられた産業は台湾の特性となり、間接的にはいえ、日本の經濟發展の一翼を担ったと言える。

このように日本の当時の産業の内容と台湾開祖・鄭成功には密接な関係があったとする見方が

できる。当時の新聞記者は、新たに日本の領土に加わった台湾について、ただの異国の土地ではなく、日本に縁ある鄭成功を引き合いに示そうとしたと考えられる。

Ⅲ. 鄭成功への歴史的認識に関する記事

東京『朝日新聞』1894年12月13日付の「明の遺民劉姓の事」に次のようにある。

盛京省貔子窩の近地に姓劉なるものあり資巨萬を積み貸舗を復州、普蘭店、金州、貔子窩の四所に開けり。我外務書記官鄭永昌氏の第二軍に従ひ貔子窩に入るや清人を使ふて我用を爲さしめんと欲し其人を求めんとて之を搜索せしに、兵站司令部の附近に金榮喜なるものあるを聞き之を訪へり金ハ喜びて之を延き問ふて曰く、貴公姓名清人に近し或ハ今回日本軍に降りしものにハあらざるかと。鄭氏笑ふて曰く、然り貴下夫の鄭成功なるものあるを知るや成功ハ則ち余の祖先なり。明朝満清の吞滅する所となり我祖其粟を食ふを欲せず瓢然去て日本に帰化せり今、王師海を渡りて満清の暴をあつするに當り、余亦其軍に従ひ涯分を盡して以て明朝を恢復し以て祖先の志を遂んとす。

文中に登場する鄭永昌氏は、日本の外務書記官を務め、鄭成功の子孫を自称していた。彼らの祖先である鄭氏は、明朝の滅亡後に遺臣として日本に亡命し、彼らはすでに日本に帰化していた。この記事で鄭永昌氏は、かつて復明抗清を誓った鄭成功を誇りに思っており、自身も日清戦争下において清朝に対抗することを誓っている。

この記事は、明朝の臣下として清朝に対抗していた鄭成功と、その遺臣として日本から再び清朝に対抗する意志を見せる鄭永昌氏という構図から、日清戦争の最中であった当時の日本人に、清朝に対する対立感情を煽ったのではないだろうか。

日清戦争という時代背景を通して見る日本における鄭成功像は、時代は相違するが、共通する敵である清朝に立ち向かう象徴として描かれていたと言える。

東京『朝日新聞』1896年5月7日付「社説 台湾行の吏員を餞す 鬼哭子」には、次のようにある。

近時臺灣總督府の吏員として渡航するもの前後武を接す。余輩ハ此等の諸氏に向つて一言する所あらんとするふり而して、其前に於て茲に吏員と稱するものハ軍人以外の行政官吏等たるを述べ置くなり。抑々台湾の地たる我範圍に帰せざる以前ハ案外にも之が事情に通ずるもの鮮なく従つて、之を處理する所以の道も往々新奇ならざるを得ざるものあり。是れ余輩の言を待たずして明瞭なところなり。然れども又一方より之を考ふるときハ之を見ること新奇に過ぐるハ却て宜しきを失ふの虞なしと爲さざるなり之を同島の歴史に徴するに我邦に舊縁あるハ何人も已に熟知するところにあらずや、鄭成功の同島に據り其子孫が數十年間能く戦勝者たる清國に對して抗敵せし所以のもの其れ豈偶然ならんや。而して、鄭成功あるもの彼れ何人ぞや其素性を詳にすれば則ち少くも一半ハ我日本人の同胞なりと稱するも敢て不可なきなり。

加之ならず余輩が曾て評せし如く鄭成功が明末に於ける出處進退の明潔なる、寧ろ我邦の士風に酷似するものあるなり。

(略) 抑々勇敢にして而かも廉潔なる士風ハ優かに民衆の心を服するに足れり。已に述ぶる如く、鄭成功が能く同島を以て立脚の地と爲せし所以のものハ未だ曾て素養する所なくんバあらざるなり、之れを成功の素行に徴するに終始前後更に矛盾する所あるを見ずして忠實の一念ハ遂に貫徹せられたるを知るなり。

(略) 我國民ハ早晩此鎖國的臭味を脱却せざるべからざるの趨勢なれば、此點より之れを見るも諸氏の如きハ實に重且つ大なりと云わざるを得なり。余輩ハ、諸氏が國家の爲めに忠誠に事に従い、以て新附の民衆の心を得るに相違なきを信ずると雖も、近來我内地に於ける士風□□(解説不可)に消磨し去り時に、或ハ成功其人に愧ずるの場合少なからざるを見て豫め之れを警告し以て聊か参考に供せんと欲するのみ。若し其れ我軍人社會の如きハ、余輩の言を俟たざるも優かに成功をして愧死せしむべきの挙動あるべきを信ずるなり。

これは、日清戦争後に新たに日本の領土となった台湾へ赴任する行政官吏にあてたものと思われる。記事の内容として、前半部分は台湾と日本の歴史的関係のひとつとして、鄭成功の存在を挙げている。後半部分は、開国して以来“鎖國的臭味”からの脱却にあえぐ日本人のことを憂いている。また、台湾へ向かう官吏の一行には、現地の民心を得るために、成功を凌ぐほどの活躍を見せてほしいと励ます言葉で締めくくっている。

この記事には「余輩が曾て評せし如く鄭成功が明末に於ける出處進退の明潔なる、寧ろ我邦の士風に酷似するものあるなり」という一文があり、これは恐らく成功に宿る武士道精神のことを指していると読み取れる。成功の素行に関しても、裏切りを一切せず忠実を貫き通したこと、さらには戦場での戦術、台湾平定後の政略に対しても記者の成功に対する賞賛は大きい。

東京『朝日新聞』1916年5月2日付「台湾記(5) 台南の旧都(下) 鉄腸」には、次のようにある。

台南の一巡を了りて、其日打狗に向ひ、港務部の汽艇にて築港を視察し、一泊、道を轉じて阿□に至れば、まさに激熱百度に近し、臺灣製糖會社の工場を一覧し、阿緱市街を巡りて、これより一行多く嘉義に返す、予は臺灣趣味の、臺南に在るに親しまん志ありて、途に獨り鉄車に別れて、再び臺南を訪ふ、臺南には孔子廟がある、聞くならく全臺第一と、俾を走らせて之に向ふの路次、府口街に臺灣の開祖鄭成功の故宅の址を弔ふ、成功計成りて臺灣に據りし以来、都を臺南に下し、この處を選んで其の第宅となしたるもの、清朝の領臺後は府署となり、更に改隸後兵營となり、今は又司令官の官舎となつている、星移り世變る今日から、何等往時を偲ぶ便りとてもないが、我邦人から國姓爺と言はるる日本人の血を受けた鄭成功が、明朝の遺臣として義憤の旗を翻し、圖南の志を懷いて、今の安平附近から、碧眼高鼻の蘭兵を破つて攻め入り、爾來臺灣一統の経略が、この第宅の裡に畫がかれたと思ふと、無量の感慨が湧いて来る。

以上は、台湾巡視に訪れた記者の手記である。台湾の製糖会社の工場や市街地を視察した後に、記者は一人、再び台南を訪れ孔子廟や鄭成功がかつて住んでいたという家を訪れた、その時の内容である。

この記事でも鄭成功の「日本人の血を受けた」という部分を強調し、彼の素性を説明する。ま

た鄭成功の故宅を前に「無量の感慨が湧いて来る」と記者は鄭成功に思いを馳せるが、このように書くことで、鄭成功が日本人にとって異国の英雄と割り切られるものではなく、特別近い感情を抱かせる存在であると見ていたと見ることができる。

ここまで日本人の鄭成功への歴史的認識に関する3件の記事を見てきた。上述のように、明治時代の新聞記事に着目した理由は、明治時代が日清戦争の始まりと勝利の結果としての台湾の領有という一連の流れを包括し、日本人にとって台湾が一番身近に感じられた時代ではなかったかという考えを持ったためである。実際にこの時期の新聞には、台湾巡視の結果報告を主とした記事が多く掲載され、鄭成功に関する話題も併記されていた。

日本において鄭成功が好意的な評価を得られた理由は、彼が日中混血であることの親近感や、「二君に見えず」とした日本の武士道に似た信念を持っていたからと考えられたが、それだけではないことが本稿からも明らかであろう。

東京『朝日新聞』1894年12月13日付「明の遺民劉姓の事」は、日清戦争の最中の記事であり、これは鄭成功の抗清復明になぞらえ、暗に日本に清朝との対立感情を煽ったものとの看取りが可能である。また、東京『朝日新聞』1896年5月7日付「社説 台湾行の吏員を餞す 鬼哭子」と、東京『朝日新聞』1916年5月2日付「台湾記(5) 台南の旧都(下) 鉄腸」とは、ともに日清戦争後の記事で、鄭成功の出自について日本に由縁があることを指摘し彼を称賛する。ここから鄭成功の人物像とは、“少数勢力でありながら清朝に立ち向かった勇猛果敢な武将”であり、日清戦争が起きた当時、日本人は日本と中国の混血であった鄭成功を我身と重ねたと考えられる。そして日清戦争の結果は、“小国でありながらも清朝に打ち勝った日本”が鄭成功の仇討ちをしたという形で日本人の中に現れたと見ることができよう。

4 おわりに

明治期の日本人が鄭成功像をどのように認識したかを知る一方法として、明治期に出版された書籍や新聞記事より鄭成功に関する記事から読み取れる鄭成功の人物像を考察した。

日本人が鄭成功を知る契機となったのは、江戸時代に鄭成功が浄瑠璃『国性爺合戦』の題材に取り上げられたことであり、そこから彼が日本でもよく知られ、好意的な人物として取り上げられるようになった。明朝へ最後まで忠誠を誓った「武士道精神」や、「中国・台湾に代表される英雄」というイメージを持つ彼に、日本人の血が流れていたことにあると考えられた。しかし実際の鄭成功の人物像は、明治期日本の世相を投影されながら形成されたと言えよう。その結論は次のように言えるであろう。

明治期の新聞記事を見る限り、日清戦争前、戦争中、戦争後の時代の趨勢によって、「日本における鄭成功像」の意味合いが変化して行った。おそらく、日清戦争がなければ、鄭成功は『国性爺合戦』に紹介されるとおりの揺るぎない忠誠心を持った明朝の遺臣としか日本人には伝わらなかったはずである。「清朝に敵対する鄭成功」、「清朝に対峙する日本」などの構図を作り出し、物語に併せて日清戦争における国民感情をなぞらせる手法、つまりプロパガンダ的手法を利用す

るため、鄭成功はこの時代に注目されたと考えられる。

明治期の日本人は、“少数勢力でありながら清朝に立ち向かった勇猛果敢な武将”である鄭成功を、新聞記事を媒体として清朝に対する敵対心を煽る手段として利用し、日本の国民はその時に置かれていた日本の立場と重ねたと考えられる。さらに日本は日清戦争に勝利した。“小国でありながらも清朝に打ち勝った日本”による勝利は、ついに清朝に打ち勝つ事のできなかった鄭成功の仇を打った日本といった立場を作り上げたのではなかろうか。実際、日本が清朝に勝利しなければ台湾の領有はあり得ず、日清戦争後に鄭成功に関心を向けられることも、ここまで彼が称賛されることもなかった。

日本が明治 28 (1895) 年から台湾を領有し、台湾における産業に注視する。そのため鄭成功と鄭政権の治世期に砂糖製造や樟脳生産などが大きく拡大したことなど、記事の話題として、日本との関係から台湾の開祖としての鄭成功の紹介がされた。鄭氏政権期からの台湾の産業発展に関する記事から、直接日本から見た鄭成功像を見出すことは難しい。しかし、鄭成功の治世より始められた砂糖の製造や、樟脳の製造方法の伝播などは台湾を領有していた時期の日本の産業にも影響を及ぼしたと言える。国家的事業として台湾に近代的な甘蔗製糖会社の設置を計画し、台湾糖業の改革を行った結果、日本には大量の砂糖が供給され⁽³⁰⁾、さらに樟脳を輸出産品として着目した鈴木商店のような企業の存在があった。日本が台湾を領有した当初、すぐに着手可能な産業が、砂糖や樟脳の生産であった。これらの産業がいつ頃台湾で開始されたかを遡ると台湾の開祖・鄭成功の治世にまでたどり着く。台湾産業の開拓者とされる鄭成功が日本人の血を引いているのが偶然とはいえ、当時の日本人には、鄭成功及び台湾と、日本の関係が密接であることが印象付けられたと言えよう。

鄭成功が中国や台湾で親しまれ、英雄と扱われている理由が、現在の台湾の社会秩序の基盤となるものを作り上げた開祖としての役割を担ったことである一方、日本における鄭成功の人物像とは、「好感を持てる忠義を持った清廉潔白な武将」としてや、「日本人の血を引く英雄」であることのほかに、日清戦争当時には、多数勢力に立ち向かう少数勢力という不利な状況を持つ同胞との視点に立脚したことで、日本人が鄭成功に強い好感を持ったことは確かであろう。そして日清戦争後、台湾を領有してからは、台湾の社会基盤を作り上げただけでなく、日本の産業にも恩恵を与えた偉大なる開祖として鄭成功像が日本人の中に現れたと言えるのではなかろうか。

注

- (1) 石原道博『国姓爺』吉川弘文館、1957 年 4 月、1-21 頁。
- (2) 二宮一郎「日本における鄭成功関係文献目録」、『中国研究月刊』第 526 号、1991 年 12 月、20-36 頁。
細見和弘「鄭成功文献目録－華文編－」上、中、下、『中国研究月報』第 528 号、1992 年 2 月、26-37 頁。第 529 号、1992 年 3 月、35-42 頁。第 530 号、1992 年 4 月、26-37 頁。
川勝守「日本における鄭成功研究をめぐって」『中国研究月報』第 47 巻第 6 号、1993 年 6 月、26-31 頁。
これらの研究紹介に日本、中国、台湾などの先行研究が見られるが、本稿で述べるような視点では取り上げられた先行研究は見られない。
- (3) 黄典權「鄭成功之歴史評価」60-76 頁、黄典權『鄭成功史事研究』臺灣商務印書館、1975 年 6 月、1-

125 頁，所収。

- (4) 郡司正勝「舞台の国姓爺」、『人物叢書 附録第 22 号』，吉川弘文館，1959 年 4 月，1（1-3）頁。同書に「近松門左衛門の浄り「国性爺合戦」が，大坂竹本座の人形舞台にかかったのが，正徳五年（一七一五）十一月で，大当りで。三月越十七ヶ月間の未曾有のロングランであったと伝えられるから，すぐさまそれは歌舞伎の舞台へも移入された」とある。
- (5) 黄遵憲の光緒 20（1894）年 3 月序『日本國志』卷六，鄰交志上三，華夏，黄遵憲『日本國志』上海古籍出版社，2001 年 2 月，71 頁。
- (6) 石原道博『明末清初日本乞師の研究』富山房，1945 年。
- (7) 石原道博『鄭成功』三省堂，1942 年 11 月，211-224 頁。
- (8) 石原道博『鄭成功』三省堂，1942 年 11 月，全 256 頁。
- (9) 石原道博『国姓爺』吉川弘文館，1959 年 4 月，全 120 頁。
- (10) 厦門大学歴史系編『鄭成功研究論文選』福建人民出版社，1982 年 6 月，1-404 頁，同書には 17 編の論文が収録されている。
- (11) 鄭成功研究學術討論会學術組『鄭成功研究論文選續集』福建人民出版社，1984 年 10 月，1-339 頁，同書には 27 編の論文が収録されている。
- (12) 李瑞良「鄭成功和海外貿易」，厦門大学歴史系編『鄭成功研究論文選』福建人民出版社，1982 年 10 月，223-231 頁。
- (13) 陳孔立「鄭成功收復台湾戦争の分析」，厦門大学歴史系編『鄭成功研究論文選』福建人民出版社，1982 年 10 月，304-321 頁。
- (14) 傅衣凌「関于鄭成功の評価」，厦門大学歴史系編『鄭成功研究論文選』福建人民出版社，1982 年 10 月，232-244 頁。
- (15) 同書，244 頁。
- (16) 陳国強「民族英雄鄭成功收復台湾の偉大貢獻」，厦門大学歴史系編『鄭成功研究論文選續集』福建人民出版社，1984 年 10 月，48-58 頁。
- (17) 乾隆『潮州府志』卷 38，征撫，『中国地方志集成 廣東省府縣志輯』第 24 冊（全 51 冊），上海書店・巴蜀書社・江蘇古籍出版社，2003 年 10 月，1-1121 頁。
- (18) 同書，935 頁。
- (19) 同書，935 頁。
- (20) 『明清史料』丁編，第 3 本，215 頁。『鄭氏史料續編』291，「五大商會定老等私通鄭成功殘揭帖」。
- (21) 石原道博『国姓爺』吉川弘文館，1959 年 4 月，80 頁
- (22) 田村成義編著『統緒歌舞伎年代記 乾』鳳出版，1976 年，458-459 頁参照。
- (23) 『国姓爺討清記』六合館弦巻書店，明治 27（1894）年 10 月 12 日発行。国会図書館近代デジタルライブラリーによる。
- (24) Ludwig Riess, (1861-1928 年)，ドイツの歴史学者，1887 年に来日し，帝国大学をはじめ慶應義塾大学などでヨーロッパ史など歴史学を講じた。金井圓「リース」，国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』14 卷，吉川弘文館，1993 年 4 月，515 頁参照。
- (25) 林満紅『茶・糖・樟脳業與臺灣之社會經濟邊遷（1860～1895）』聯經出版，1997 年 4 月初版，1998 年 1 月初版第二刷，33-37 頁参照。
- (26) 林満紅，同書，33-37 頁参照。
- (27) 林満紅，同書，72 頁参照。
- (28) 台湾における製糖技術の導入時期には諸説あり。
林田芳雄氏『鄭氏台湾史—鄭成功三代の興亡実紀』汲古書院，2003 年 10 月，177 頁には，“甘蔗（砂糖黍）は砂糖の原料となるもので，蘭領時代から栽培を奨励し，それに伴って砂糖製造法も導入された”と記述されている。
- (29) 鈴木商店親睦組織「辰巳会」ネット記念館運営委員会・編集委員会「鈴木商店記念館」<http://www.>

suzukishoten-museum.com（最終アクセス：2015 年 12 月 21 日）。

③0 植村正治『日本製糖技術史』清文堂出版株式会社，1998 年，398-403 頁。

（平成 28 年 3 月卒，香川銀行勤務）